学生の人格発達と学習に関する調査中間報告

― 調査用紙の作成 ―

西垣順子・小林正信・相澤　徹・橋本　功

1．調査の目的と項目の設定

本誌の小林論文の報告にもあるように，現在の信州大学生の人格発達，特に少人数集団への適応と大学生としての自覚に関する調査を行い，基礎的なデータを収集する必要性は，以前から指摘されている（小林・進藤・橋本，2002)。そこで本年度は教育システム研究開発センターと保健管理センターが合同で調査プロジェクトを立ち上げることにした。

ただし，この調査の目的は広範囲にわたり，すべてを網羅する調査用紙を作成すると膨大な量の質問項目を用意しなければならなかった。そのため，調査を二本立てで行うことにした。ひとつは「少人数集団への適応」に関する調査，もうひとつは「大学生としての自覚と現実的な目標達成」に関する調査である。どちらの調査も，現在のキャンパスライフへの適応状況を尋ねる質問と組み合わせて配布し，それぞれの調査対象とキャンパスライフへの適応状況の関連を検討することにした。

以下の2つの節において，それぞれの調査用紙について，実際に用意した調査項目とそれらの項目を設定した目的について報告する。

2．調査用紙1「少人数集団への適応」

ゼミナールや研究室などの少人数集団での学習に参加する場合，大講義室で黙って授業を聞いている場合よりも，緊密な人間関係が必然的に発生する。学業の一環として他者とは異なる自分の意見を主張してディスカッションをする状況もあれば，授業の前後の時間などでインフォーマルな交流を持つ中で，他者と利害が対立することもある。

3人以上の集団では1対1の関係よりも対人関係が複雑になり，その分対人ストレスも生じやすい。そのため学生によっては3人以上の少人数集団への参加を避け，二者関係に依存する傾向があると予測できる。本調査ではこの＜二者関係への依存と固執＞に関する項目を，下記のように5項目設定した（「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階評定。以下同様)。さらに他者と一緒にいるということは自分が傷つけられる恐れがあるということでもあるので，それを避けて安全な自分自身の世界にのみ閉じこもる傾向に関する項目も＜閉じこもり＞として下記のように4項目用意した。なおこの傾向については坂本（1997）の「没入尺度」を参考にした。

それらとは逆に集団活動に適応している状態であるかを問う項目も＜集団への適応＞として，下記のように3項目設定した。さらに相手に一方的に依存するのでもなく，また他者から孤立するのでもない，健康的な他者依存と他者への信頼感を持っているかを問うための項目を＜健康的な他者依存，信頼＞として下記のように7項目設定した。

＜二者関係への依存と固執＞

・親しい友人や恋人に依存し，相手が思うように応じてくれないことに不満を懐いてイライラする傾向がある。
・親友や恋人には，いつも自分に対してだけ注意を向けていて欲しいと思う。
・親しい友人や恋人と二人で過ごしているときに，他の人がやってくるのを好まない。
・二人より三人以上の複数で行動した方が楽しいと感じる。
・比較的多くの人と団欒を楽しむよりも，親しい友人や家族の誰か一人とだけ話をするほうが好きだ。

＜閉じこもり＞
・自分の部屋に一人で閉じこもって，空想の世界に耽溺して何時間も過ごしてしまうことがある。
・うまくいかないことがあると，自分の世界に閉じこもってしまう。
・自分がこういう人間であればなあと，いつまでも長い間，空想することがある。
・自分のことを考え出すと，それ以外のことに集中できなくなる。

＜集団への適応＞
・そこに所属することで充実感や安心感が得られ，その発展のために寄与したいと思う集団を持っている。
・所属している集団のなかで与えられた役割を責任をもって遂行できている。
・所属している集団のなかで自分の意見を心おきなく主張できる。

＜健康的な他者依存，信頼＞
・心からリラックスして，親しい友達と過ごす時間を楽しめる。
・自分自身を見失わずに，親密に付き合うことのできる友人や知人，または恋人がいる。
・周囲の人々に関心をもち，配慮し，理解を深めている。
・悩みごとなど，何でも話せる親しい同性の友人がいる。
・節度をもった付き合いができる異性の友人がいる。
・家族のことに関心をもち，配慮し，理解を深めている。
・親に対する礼節を保ちながら，安心して大学生活のことなどを語ることができる。

集団での活動の中で重要であり，かつ難しいのは自分の意見を主張することであろう。自己主張が強すぎると他者の反発を招くことにもなるが，自分を押し殺して何も言わないでいては，結果的に不本意な状況を押し付けられることにもなりかねない。そこで本調査では，<他者への適切な自己表明>に関する項目を5項目設定した。なお，この項目の設定に当たっては平石（1990）の「自己表明・対人積極性」尺度を参考にした。

＜他者への適切な自己表明＞
・こんなことを言ったら相手に嫌われるという心配があっても，言うべきことは言う勇気がある。
・相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。
・自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている。
・疑問を感じたら，それを堂々といえる。
・自分の定めた目標を達成するために必要な場合には，世間体や見栄を第二義的に考えた

り，時には捨てることもできる。

適切な自己表明ができない理由として考えられるのは，被評価意識が高すぎて対人緊張が高まっているということである。他者からどう思われるのかを気にするあまりに，自分自身が窮屈な思いをしている状態を指す。これに関する項目を＜被評価意識，対人緊張＞として，下記のように6項目設定した。

また，適切な自己表明を行うためには，自分自身を信頼していなければならない。自分自身を内省し，ある程度の孤独に耐えることができるかどうかを問うために，<自分自身への信頼感＞に関する項目を下記のように5項目設定した。

＜被評価意識・対人緊張＞

- 人から何か言われないか，変な目で見られないかと気にしている。
- 人に対して，自分のイメージを悪くしないかと恐れている。
- 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる。
- 他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている。
- 無理して人に合わせようとして窮屈な思いをしている。
- 自分が他人より劣っているか優れているかを気にしている。

＜自分自身への信頼感＞

- 自分の言うことや考えることを，完全に受け入れてくれる人物がいたらいいのにと，思うことがある。
- １人ですごす時間を楽しむことができる。
- 誰かから厳しい意見を言われても，混乱することなく聞くことができる。
- 自分自身の生き方や価値観について，真剣に自問することができる。
- 自分の内面に感じるものを言葉にして表現する何らかの努力（語る／書くなど）を，これまでにしてきた。

さらに一人で何かをする場合とは異なり，集団で活動する上では他者から何らかの期待を寄せられることがある。その期待に応えられなかった場合，他者からの否定的評価が気になって冷静に対処できないということもありうる。些細な失敗がきっかけになって集団活動に参加できなくなるということも考えうる。そのため本調査では＜期待に応えられなかった場合への対処＞に関する項目として以下の3項目を用意した。

＜期待に応えられなかった場合への対処＞

- 期待されていた目標が達成できなかった場合，落ち込んでしまって何も手につかなくなる。
- 期待されていた目標が達成できなかった場合にも，目標設定や手段の選択に問題がなかったかを冷静に点検できる。
- 周囲の期待に応えられずに失敗した場合，他の世界に逃げていってしまいたくなる。

以上に加えて，基本的信頼感を測定するための項目も用意した。基本的信頼感とは我々が心の一番深いところで，自分や自分を取り巻く人々と社会を信じているという信頼感である。

エリクソンの発達理論の中では乳児期の発達課題であり，生涯にわたる人格発達に影響を与えるものとされている。調査項目としては谷（1996）の「基本的信頼感尺度」を参考に作成した。

＜基本的信頼感＞

・私は自分自身を十分に信頼できると感じる。
・親しい人の些細な言動がきっかけで，その人から見捨てられたのではないかと心配になることがある。
・人生に対して，不信感を感じることがある。

3．調査用紙2「大学生としての自覚と現実的な目標達成」

大学という学びの場は，学生がこれまでに通過してきた初等・中等教育とはある程度異なる学びの文化をもつ空間である。大学での学びの特徴として，自己制御的学習（self-regulated learning）の要素が強いということが挙げられる。自己制御的学習とは自ら学習の目標を設定し，その目標を達成するために自ら学習環境を整えたり，自己管理をしたりすることをいう（Zimmerman, 2001）。

大学生においては様々な学習活動が展開されるが，その意義や目標は教員などから与えられるものではなく学生自身が考えなければならないものである。またそうでなければ，最後まで努力をすることは難しいだろう。また設定される目標はある程度は現実的なものでなければならず，場合によってはより実現可能な下位目標を設定して努力する必要もある。

大学で学ぶ目標を定めることは，大学生のアイデンティティの確立との関係が深いと思われる。アイデンティティとは自分は自分であるという確信のことである。アイデンティティの確立は青年期の発達課題でもある。そこで本調査では，<アイデンティティを確立するための内省的態度>を測定する項目を5項目設定した。さらに現実的な目標追求を行っているかを問う項目も<現実的適応的な目標追求>として，5項目用意した。

アイデンティティには現在の他者との関係で自己を捉える側面と，過去と未来の自分との関係で現在の自分のあり方を決定する側面とがある。後者に相当する時間的展望（time perspective）に関する項目も本調査では設定した。時間的展望には<希望・充実感>と<過去受容>の両方があるので，それぞれ4項目ずつ設定した。なお，項目の選定に当たっては白井（1994）を参考にした。

＜アイデンティティを確立するための内省的態度＞

・自分自身の生き方や価値観について，真剣に自問している。
・将来の進路について，必要なことをじっくりと考えている。
・自分がどんな人間なのか，何をしたいのかを真剣に迷い，考えたことはない。
・自分の内面に感じるものを言葉にして表現する何らかの努力（語る／書くなど）を，これまでにしてきた。
・今のキャンパスライフをどうしたら充実することができるかを，必要に応じて考えたり相談したりできる。

＜現実的で適応的な目標追求＞

・将来の進路や，現在のキャンパスライフを充実させるための現実的な目標を，自主的に設定できる。
・自主的に目標を設定し，その達成や実現のために，現実に即して計画し，行動できる。
・自分で定めた目標の達成に必要な場合には，世間体や見栄にしばられないようにつとめ，時にはそれらを捨てることができる。
・目標を達成するために必要な場合には，他にやりたいことを我慢することができる。
・目標を達成するために必要な手段を，積極的に考えたり，調べたりする。

＜時間的展望，希望・充実感＞

・社会的に肯定された役割への自覚と責任感をもって，生きていきたいと思う。
・大学を出たあとどうしたいか，目標と希望を抱いて学んでいる。
・将来に希望を持ち，自分は将来どうありたいかを考え，それに向かって努力している。
・自分にあったよい職業とは何かを，まじめに考えることができる。

＜時間的展望・過去受容＞

・今の自分は本当の自分ではないような気がする。
・自分の過去の良かったことも良くなかったことも，受け入れることができる。
・過去のことは考えたり，思い出したりしたくない。
・やり直したい過去があっても，「それは現在の努力と将来への希望に繋げるしか解決の方法はない」と考えることができる。

アイデンティティを確立する過程においては悩みや葛藤はつきものである。それらを過度に避けることは人格発達を阻害することにもなりかねない。だが，それらと正面から向かい合うことができず現実逃避をする青年たちも存在すると思われる。本調査では＜閉じこもり・現実逃避＞に関する項目と，＜不安，悩みへの対処＞に関する項目を4項目ずつ設定した。

＜閉じこもり，現実逃避＞

・自分の部屋に一人で閉じこもって，空想の世界に耽溺して何時間も過ごしてしまうことがある。
・自分がこういう人間であればなあと，いつまでも長い間，空想することがある。
・現実から目をそらして空想の世界に没頭してしまう傾向がある
・これから行おうとしている自分の行動の結果を正しく予測できる。

＜不安，悩みへの対処＞

・健康な人間は不満や不安とは無縁であると考える。
・不満や不安を抱えながらも勉強や仕事を完成させることができる。
・スポーツに打ち込んだり，趣味を楽しむことで不満や不安を乗り越えることができる。
・「悩むことは辛いかもしれないが異常なことではなく，心の成長のために必要なことだ」と感じることが出来る。

また設定した目標を達成するためには，その基盤である生活が自律されていなければならないので，＜生活の自律性＞を問う項目も設定した。

＜生活の自律性＞

・清潔なものを身につけ，身体の清潔を心がけている。
・自室を掃除するなど，生活環境の整頓を心がけている。
・小遣い，奨学金，アルバイト代などの月々決まった収入を，自分で計画的に管理できている。
・自らの心身の健康を適切に管理している。

さらに，学生には大学生としての社会的自覚を持っていることが望まれる。進学率が上昇したとはいえ，高等教育を享受できるのは同世代の青年たちの半数程度であり，世界的に見ればごく小数でもある。

1998年にユネスコ高等教育世界会議で採択された「21世紀に向けての高等教育世界宣言―展望と行動および高等教育改革と発展のための優先行動の枠組み」では，高等教育の使命と役割として，高等教育機関に所属する教職員と学生はともに倫理的，社会的，文化的な役割をもち，責任を果たすべき存在であるとされている（章末資料参照）。

そのような大学生には，将来どのような職業に就き，どのような形で社会に参加してそこに暮らす人々のために働くことになるとしても，広く社会の動きや歴史・文化に対する積極的な関心を持つことが期待される。本研究でも＜歴史・文化・政治・環境への関心＞を問う項目を設定した。

＜歴史・文化・政治・環境への関心＞

・自分達の住んでいる地域や地球の環境，日本と諸外国の歴史・文化・政治に関心を持っている。
・日本や諸外国の歴史や文化に関する本を読むことがある。
・新聞を読んだりニュースを聞いたりして，政治・経済・社会の動向に注意を払っている。
・自分は地域社会の一員であるという責任感を自覚することができる。
・大学での学業に興味ややる気をもって取り組んでいる。
・自発的に予習や復習をする。
・自発的に学業に関する本を読んだりして，知識を豊かにするようにしている。

4．今後の計画

上述の項目をランダムに並べ替え，キャンパスライフへの適応状況を問う調査と組み合わせたアンケートを10月末に1年生から4年生の学生を対象に配布し，11月に回収した。今後集計と分析の作業を行い，近いうちに結果をまとめる予定である。

引　用　文　献

平石賢二　1990　青年期における自己意識の構造―自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康　教育心理学研究，38，320-329.

小林正信・進藤政臣・橋本功　2002　メンタルヘルス相談事例から見る学生の抱える諸問題，信州大学教育システム研究開発センター紀要，8，3-18.

坂本真士　1997　自己注目と抑うつの社会心理学　東京大学出版会
白井利明　1994　時間的展望体験尺度の作成に関する研究，　心理学研究，**65**，54-60.
東京高等教育研究所・日本科学者会議　2002　大学改革論の国際的展開―ユネスコ高等教育改革宣言集　青木書店
谷　冬彦　1996　青年期における基本的信頼感と時間的展望　発達心理学研究，**9**，35-44.
Zimmerman, B.J. 2001 Theories of self-regulated learning and academic achievement: An overview and analysis. In Zimmerman, B.J. & Schunk, D.H. (Eds.) *Self-Regulated Learning and Academic Achivement: Theoretical Perspectives.* New Jersey, Lawrence Erlbaum Associates.

資　料

高等教育の使命と役割

第２条　倫理的役割，自治，責任および期待される役割

1997年11月，ユネスコの総会で承認された高等教育の教育職員の地位に関する勧告に従い，高等教育機関およびその教職員と学生は，

(a)　さまざまな活動における，倫理的および科学的，学術的精密さの実践をつうじて，その重大な役割を保持し，発展させなければならない。

(b)　熟慮し，理解し，行動するために社会が支援を必要とするある種の知的権威を行使することにより，倫理的，文化的および社会的な諸問題に関して，完全に独立して，かつその責任を十分に自覚して発言することができなければならない。

(c)　予測し，警告し，防止することに焦点をあて，発現する社会的，経済的，文化的，政治的諸傾向のあらわれを継続的に分析することをつうじて，その批判的かつ先見的な役割を強化しなければならない。

(d)　ユネスコ憲章に掲げられているように，平和と正義，自由，平等および連帯をふくむ普遍的に認められている価値を擁護し，かつ積極的に普及するために，その知的能力および道徳的な威信を発揮しなければならない。

(e)　社会に対する十全な責務と説明責任を負いながら，一連の権利および義務として考えられる完全な学問の自治と自由とを享受しなければならない。

(f)　地域社会，諸国家および地球社会の安寧に影響する諸問題を認識し打開することを支援するうえで役割を果たさなければならない

ユネスコ高等教育世界会議　1998年10月９日採択

「21世紀に向けての高等教育世界宣言―展望と行動および高等教育の変革と発展のための優先行動の枠組み」（東京高等教育研究所・日本科学者会議，2002）より引用